
コラム 6

初代日本人専門家 菊地勇さんに聞く

私は 2005 年 9 月から 2 年間の任期中、スーダン統一政府の国際協力省（MIC）に派遣されました。赴任当初スーダン側は、私が要請書に書いてある以外の業務（スパイ？）をするのではないかと、どういう人間なのかと、非常に警戒されました。尾行こそされなかったものの、携帯電話の盗聴など、常に監視されているような感じも受けました。

援助慣れした国と異なり、外国人と一緒に働くことに慣れていないのもあるのでしょうね。特に組織的な仕事も得意でなく、職位に関係なく、個人プレーで仕事をしているような印象を受けました。

そんななか、初めのカウンターパートになったマハ女史は、非常にパワフルな人で助かりました。JICA が供与した公用車で通勤したいとゴネたり、なかなか難しいところもあるのですが、一度約束すると最後までフォローしてくれる人でした。南部スーダン向けに機材を送ることになり、免税手続きのフォローをしなくてはならなかったのですが、誰に聞いてもやったことがなくわからない、という事務処理をひとりで奔走して、許可証を取りつけてくれたこともあります。

2006 年頃は、南部スーダンの事業が先行し、北部スーダンの事業があまり進展を見せていなかったため、MIC からは常に「南北バランスよく協力してくれ」という強いプレッシャーを受けましたね。例えば、日本や近隣国での研修へ参加してもらう場合にも、必ず受入枠を 2 の倍数の枠を用意して、南北同数の人数を受け入れるように配慮するなどです。

南部スーダンに来る調査団や来訪者のアレンジ（支援）は大変だったですね。アポイントを取りたい相手にメールをしても返事がなければ、電話をしてもつながらない。大事なものは、事前にジュバに行き、宿舎・車両・アポイントメントの確認をする必要がありました。もっとも事前に確認しておいても、アポイントも予約もあつてないようなものでしたが。

以上